

## 15. 新大陸発見第四説

新大陸発見にはまだ説があり、まず旧約聖書から話を始めます。聖書は英語で バイブルで、これはギリシャ語で書物を意味するタ・ビブリアが語源で、紀元前の紙としてはナイル河畔に繁茂するパピルス（葦）の茎を叩いて伸し乾燥して紙状のものを作り、これに文字や絵を書いていた。この特産品を地中海沿岸の各地に輸出していましたが、これを運んでいたのが海の遊牧民と言われていたフェニキア人で、其の輸出港がビブロス港でしたが、いつのまにかパピルスはビブロスと呼ばれ、それが書物に転化してバイブルになったと言われていきます。

地中海を縦横に航行していたのがフェニキア人で、歴史を学ぶとき最初の謎に包まれるのがこのフェニキア人です。この民族は知的水準が高く、アルファベットの元になる 22 の子音文字からなるフェニキア文字を最初に作ったのはこの民族です。また造船技術、航海術にも優れ旧約聖書にも其の活躍が記されており、また世界最古のアルファベットであるフェニキア文字の銘文がブラジルやアフリカ東岸で見付かっており、紀元前に大西洋を渡っていたりアフリカ南端を回っていたことになりなりますが、フェニキア人は自分たちの文字を持っていたにもかかわらず全く其の活躍の古文書が見付からず、更に優れた造船技術、航海術も海の遊牧民として独自に開発して居たのですが、民族の秘密として他民族には絶対に漏らさなかったため何の記録も残さずに歴史上から消えてしまった謎の民族です。

都市文明の始まりは約五千年前からですが、自然破壊の始まりでもあったわけで、レバノン山脈の麓の低地はレバノン杉や松の豊かな森林地帯でしたが、文明が発達すると反比例するように森林は破壊され、森林の再生はうまくいかず今日に至っています。これは同じことを地中海沿岸諸国にいえることですが、代表してフェニキア人の故郷シリアとレバノンを見ましょう。レバノンの国旗は 1 本の杉をデザインしたものです。これはかつて高さ 40m を超すレバノン杉や糸杉が繁茂していたことを象徴するものですが、現在のこの地方は赤茶けた岩がむき出しの荒涼とした大地が広がります。ガディ - シカ渓谷に神とレバノン杉の聖地をつくり、辛うじて保護し、世界遺産に登録されています。

この豊かなレバノン杉が枯渇した原因を造ったのは、この地から這い出してきた地中海の遊牧民となるフェニキア人で杉を切り倒してはせっせと船を造って地中海に乗りだしました。船は初期のガレー船で一部帆を使いましたが、主に櫂で航行しました。船の建造には膨大な木材を必要とします。船の大きさは映画「ベンハー」の海上シーンを想像してください。ただし映画は口 - マの軍船ですから漕ぎ手は奴隷でしたが、フェニキア船の漕ぎ手は雇われた乗組員で、自分から希望して乗り組んでいたのです。その理由は個人の持ち込める荷物を認め、外国での売買の自由を保証したから商売としての稼ぎは大きかったようです。かくして海の遊牧民といわれるように活躍したのです。

これはホロメスの時代、ヘラクレスの柱(ジブラルタル海峡)を越えオケアノス(大西洋)へ乗りだしています。この当時航海できる海とは地中海のみで、ヘラクレスの柱の先のオケアノスには怪獣があり、更にその先は断崖絶壁の滝になっていると信じていたのです。この風評を意識的に流布したのがフェニキア人で、他の民族がヘラクレスの柱を出て、オケアノスの海の国々との交易を妨げたかったのでしょう。また人間の行きうる限界はヘラクレスの柱まで、と叙情詩人ピンダロの諦観と相俟って、そこを超えることに脅え、地中海こそ我が世界と信じていたようです。海の民となったフェニキア人はカルタゴに植民都市を建設、現在のチュニジア共和国の首府チュニスの郊外にカルタゴの遺跡が保存されており、見学に訪れたことがあります。



ここはブラン岬で地中海を航行するとき変針点の物標になりますから、航海者にとっては重要な物標です。従って地中海を航行する船の海の関所にもなる訳で、なるほどうまい地点に植民都市を造ったものだと感心しました。

ここを拠点として紀元前3世紀頃には北アフリカ、イベリア半島、シチリア西部を支配し、ギリシャ勢力と戦い、地中海を支配する帝国を築いていったのです。やがてロ - マ帝国が台頭し、イタリア全土を統一、シチリア北東部のメッシナとシナクサの争いに巻き込まれるとロ - マ帝国との三次におよぶ百年以上の戦役に突入するのです。特に有名なのがカルタゴの武将ハンニバルの活躍です。6万の兵と象50頭、馬1300頭という大軍を率いてロ - マ帝国を攻めるポエニ戦役です。現在の赤茶けたアトラス山脈を見て北アフリカに象がいたとは想像もできませんが、この当時は緑豊かな大地だったのです。サハラ砂漠には大森林地帯が砂に埋もれているところがあり、現地の人々は炭と化した木を掘り起こして燃料にしていますから自然の営みは不思議です。



(ハンニバル像)

このハンニバルの大軍を海上輸送し、史上有名なピレネー山脈、アルプス越えと苦難の進軍をするわけですが、アルプス越えが険路と雪に阻まれ、各個戦闘には勝利しながら長駆の遠征が祟りやがて敗北するのです。そしてロ - マ帝国軍の名将スキピオはカルタゴの本拠地を襲い、名将ハンニバルは破れてやがて自殺しております。カルタゴは屈辱的な和平を呑まされ、過酷な戦時賠償金を課せられ、更に過酷な数々の条件を押しつけ、これに反発したカルタゴ市民は第三のポエニ戦役を戦い、ロ - マ帝国軍は跡かたもないくらいの徹底的な破壊をしカルタゴを歴史の上から抹消してしまい、やがて地中海はロ - マ帝国支配下の海となるのです。このようにして全てが消えてしまい現在では謎だけが残り史学者を悩ませています。

このような歴史を辿るフェニキア人の全盛時代カルタゴの航海者ハンノ（前6～前5世紀）が率いる大船団が、ジブラルタル海峡を越えてアフリカ西海岸を南下し、ヴェルデ岬（現ダカール市の先端）を越え、ギニア湾の最奥カメルーン山を見たとの伝聞は、この山は海岸近くにあり4070mの高峰ですから、水平線に山の頂だけがみえるので航海の物標として利用しております。

また同じカルタゴの将軍ヒミルコが北大西洋方面を4ヶ月間航行し、航海中広大な浅瀬や無風地帯、海藻に覆われた海域、怪獣の海があったとロマの文人プリニウスが伝聞として記録しております。多分誇張があると思いますが、アゾレス諸島からサルガッソー海を当てはめてみると頷けるものがあります。この海域には出産に多数の鯨がやってきますし、それを狙うマッコウ鯨が集まり、大きなマグロやシャチも多数います。特に鯨のジャンプを初めてみれば怪獣と勘違いするでしょう。

またこれは実体験ですが、この海域を航行中の夜半当直航海士が浅瀬に乗り揚げたとの報告に慌ててブリッジに駆け上がって、測深儀の記録紙をみると海底線が最浅を示しており、レンジを切り替えても同じ結果に驚愕し、停船して辺りを見ても何にもなし、レーダーも何の反応なし、海図上では大西洋の真ん中で水深には何の問題はない。夜なので海面の色は見えない。そこで甲板部総員起こしで配置につき船首、船尾でハンドレッドで測深を試みましたが、測鉛はどんどん伸びて測深不可能、そこで測深器の故障を疑いましたが、これまた正常で、頭の中はパニック、大西洋の真ん中で狐に化かされているような異常状態に陥り、試みにスクリューを回転させてみると異常なし、舵も正常、デッドストックでしばらく走っていると、いつのまにやら測深儀が正常値を示していましたから、多分海藻の大群が舵やスクリューの回転に影響しない程度の水深のところにあったのかと思います。



（その時使用していた測深儀）

魔のトライアングルでは大量の海藻群が流れていたり、バミュダ海域には無数の暗礁・岩礁があって夜間はこれまた無数の赤い危険標識灯が広がっており壮観です。ですからこのような設備や知識が全くない時代は魔の海域そのものだったのでしょう。こういう記録があることはヒミルコ将軍の船団はこの海域まで行った査証と考えれば、もう少し西へ航行すれば新大陸ですから、もしかしたら発見していただろうと推測するのです。ただカルタゴが滅亡し、ロマ軍は徹底的に破壊してしまいましたから記録は全て焼失し、歴史の謎だけが残っているのです。もし新大陸を発見したという記録が残っていればコロンブスの発見よりも1700年も前になります。